

認識から行動へ — 新たな環境研究の動き “Future Earth” —

二〇一〇年春、はじめてカザフスタン、ウズベキスタンに跨がるアラル海を訪れる機会を得た。かつてアラル海は、アムダリア、シルダリアという大河が流れ込み、北海道を一回り小さくしたほどの面積を持つ、世界で四番目に大きな湖であった。ソ連邦時代の綿花を中心とした農業開発のために、上流で大量の水が灌漑に使われた結果、アラル海は急激に縮小した。干上がった湖底には大量の塩分が集積し、それがダストストームとなって周辺住民に多大な健康被害をもたらした。ソ連邦の解体後、アラル海を保全する取り組みが試みられたが、農業だけでなく発電など流域各国の経済を支える水資源の調整は困難で、ダムによって維持される「小アラル」だけがかるうじて残された。沿岸にあった漁業を営む集落は、環境被害に加えて生計の糧を失い、多くの人がこの地を去った。今もダストストームは起こるが、人々が去った現在、それは単なる自然現象ともいえる。そこで起きたことは、移動、あるいは放棄というきわめて消極的な環境問題の「解決」であった。

乾燥・半乾燥地域では、わずかな気候のゆらぎが地域の環境を大きく変える。歴史的にみれば、移動あるいは放棄という一見消極的な手段も、環境の変化に対する有力な適応の手段であった。一方で、人々は灌漑技術の発展、つまり技術的な革新によって農業生産を増大させ、生産と居住の空間を大きく拡大してきた。ところが、こうした技術的な革新や進化は、物質的な豊かさに大きく寄与した反面、深刻な環境問題を引き起こしている。さらに、居住・生産空間の拡大の象徴ともいえる都市も含め、すでに移動すべき空間は残されてはおらず、地球の歴

史のなかで蓄えられてきた資源を消費しつつ、われわれは今を暮らしている。

化石資源の消費は大きく地球の気候を変えつつある。食をはじめ、人のつくり出した巨大な生産システムが、地球生態系の大きな脅威となっている。実は人々がこうした環境問題の深刻さ、あるいは持続可能性への疑義に、気づいているにもかかわらず、一向に解決にむけた行動へとつながらない。アラル海も、あれだけ人々が苦しみ、それが世界的に注目されたにもかかわらず、生態系の危機は今も続いている。

一九九〇年代、とくにリオ・サミット以降、気候変動だけでなく、研究者は生態系を含む地球のシステムの解明を進めてきた。現在の危機や将来の脅威も明らかにされつつある。問題は、研究の成果が伝わっていないことではない。人々、あるいは社会が危機を十分に理解しているにもかかわらずそれが具体的な行動へとつながらない、そのこと自体を研究として問いかけることが必要とされている。環境研究は、事実を明らかにする段階から、判断し実行する段階へと移行しなくてはならないということだろう。

今、地球環境研究に関して、専門分野の枠を越えた学際的研究に加え、学問の枠をも越えて政治、行政、企業、NPO/NGO、個人とのco-design、co-productionを目指すFuture Earthという国際的な枠組みが動き始めている。科学と社会の共創による新たな環境研究の胎動である。そこでのブレイクスルーを期待したい。

Future Earthの詳細は、<http://www.icsu.org/future-earth>を参照された。

くぼた じゅんぺい／総合地球環境学研究所教授、中国環境問題研究拠点リーダー。農学博士

専門は森林水文学。地球研では、乾燥地の水問題、資源利用の歴史の変遷などの研究を行う。主な著書に『中央ユーラシア環境史（全四巻）』（監修、臨川書店、二〇一二年）など。